

詩集『ガブリエルの翼』より (1)
——イクバルのウルドゥー詩 (19) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

イクバル (Muhammad Iqbal, 1877-1938) の第2ウルドゥー詩集『ガブリエルの翼 (Bāl-e Jibrīl, 1935, Lahore)』は円熟期の詩集として高い評価を受けている。本詩集にはガザル (ghazal 定型抒情詩)、ナズム (nazm 特定のテーマについて書かれた詩)、ルバーイー (rubāʿī 四行詩)、カタ (qatʿah 断片詩) が収録されており、大部分がガザルとナズムである。代表的なガザルとナズム2篇は既に本誌に訳出した¹⁾。今回は、本詩集から短いながらもイクバルの批判精神が横溢している以下の11篇のナズムを選んで訳出した。

- 1) 神の御前のレーニン (Lēnin—Khudā kē ḥuẓūr mēn)
- 2) 天使たちの歌 (Farishtōn kā gīt)
- 3) 天使たちへの神の命令 (Farmān-e khudā—farishtōn sē)²⁾
- 4) ムッラーと天国 (Mullā aur bihisht)
- 5) 宗教と政治 (Dīn-o-siyāsat)
- 6) 大地は神に属す (Al-arḡu lillāh)
- 7) 時 (Zamānah)
- 8) パンジャーブの農民に (Panjāb kē dahqān sē)
- 9) パンジャーブの長老後継者たちに (Panjāb kē pīr-zādōn sē)
- 10) 悪魔の請願 (Iblīs kī ‘arḡdāsht)
- 11) 怒れる門弟 (Bāghī murīd)

以上の詩の中でイクバルは政教分離によって道徳性、精神性を失った西洋文明を批判するとともに、土地を専有する地主、党派対立を煽るムッラー (イスラームの指導者)、清貧の精神を忘れ、支配体制と結びつき、富を貪るスーフィー教団指導者など、インドの支配階層にも厳しい批判の目を向けている。これらの詩の中に、被抑圧者の立場からイスラームの理念を提示しようとするイクバルの姿を確認することができるであろう。

* 大阪大学名誉教授

1) 「ガザル (2)」第12巻2019年。
「ガザル (3)」第13巻2020年。
「コルドバのモスク (Masjid-e Qurtubah)」第3巻2号2010年。
「サーキー・ナーマ (Sāqī-nāmah)」第4巻1-2号2011年。

2) 1)、2)、3)の詩は連続して収録されており、内容的にも関連しているので一連の詩として読むことができる。

神の御前のレーニン

かみさま しるし
御身の徴が明白に表れています、魂にも物質界にも
かみさま
御身は確かに永遠にして不滅なる御方です
私に分かったでしょうか、御身がおられるのか、おられないのか
次々と理性の見解は変わっていたのです
世界の無始からの調べを知る者はいません
星を観察する者も植物を熟知する者もそれを知らないのです
今日、私は自分の目で見ました、あの世界が実在しているのを
教会の戯言だと思っていたあの世界が³⁾
私たち人間は昼夜の鎖に繋がれた奴隷です
かみさま
御身は時間を創造し、瞬間瞬間を守護しておられます
もし許されるなら、御身にお聞きしたいことがあります
賢者がいくら考えても分からなかったことです
大空という天幕の下で生きていたとき
その問題は棘のように私の心を刺し続けました
礼儀正しく話すことはできません
心の中に様々な想いが押し寄せているのです
かみさま
御身を礼拝する人間が誰かいるでしょうか
天の下、土から生まれた人間の中に
東洋では西洋の白人が神であり
西洋では輝く金属が神であるというのに⁴⁾
西洋には学芸の素晴らしい輝きがありますが
その暗闇には不死の水が湧き出る泉はないのです⁵⁾
見事さ、壮麗さ、清潔さにおいて
銀行の建物は教会を圧倒しています
取引を行っているように見えますが、実際には賭博です
儲けるのはただ一人、数十万人があつという間に命を落としてしまいます
情報や政策が巧みに利用されています
平等が唱えられていますが、生き血が吸われているのです
失業、半裸状態、飲酒、貧困……
西洋文明の侵略がもたらさなかったものが何かあるでしょうか
天の祝福を受けなかった者たちは

3) 「あの世界」 死後の世界。

4) 「輝く金属」 金或いは金貨・銀貨。

5) 「不死の水」 飲むと不死になると言われる伝説上の霊水。暗闇にあると言われる。西洋文明は物質主義であり、精神性を欠いているということ。

電気や蒸気を超えて進むことはできないのです⁶⁾
機械の支配は心の死
機械は人間的な感情を殺してしまいます
少しずつ兆候が表れてきました
運命は計略に王手をかけました⁷⁾
酒場の土台に振動が生じ
酒場の長老たちは頭を抱えています⁸⁾
夕刻、彼らの顔に現れる赤らみは
頬紅か盃、酒瓶によるものに過ぎません⁹⁾
御身^{かみさま}は全能で公正な御方です——しかし御身^{かみさま}の世界では
御身^{かみさま}の僕である労働者たちが辛酸を舐めているのです
一体いつ沈むのでしょうか、資本主義という船は
御身^{かみさま}がお創りになった世界は応報の日を待ち侘びているのです

天使たちの歌

理性には手綱がなく、恋には拠り所がありません
無始無終の絵師様、絵師様の絵はまだ完成していません¹⁰⁾
被造物^{ひとびと}を待ち伏せる遊蕩児、法学者、金持ち、長老
世界ではまだあの朝夕が循環しているのです¹¹⁾
富に酔う富める者たち、現状を受け入れるしかない貧しい者たち
僕^{しもべ}には住む場所がないのに主^{あるじ}は豪邸に住むのです
学問、宗教、技芸——すべてが欲望の奴隷です
困難を解決する恋の恩恵はまだ行き渡っていないのです
生の精髓とは恋、恋の精髓とは自我
ああ、しかし、この鋭利な剣はまだ鞘の中にあるのです¹²⁾

天使たちへの神の命令

さあ、私の世界に住む貧しい者たちを目覚めさせるがよい

-
- 6) 神に祝福されていない者たちは物理的な発明しかできないということ。
7) 労働者たちが反抗するようになったことを指している。
8) 「酒場の長老たち」西洋の指導者たち。
9) 西洋文明の輝きは表面的なものに過ぎないということ。
10) 「無始無終の絵師様」神のこと。ここでは恋は信仰、信仰に発する人間愛を意味する。
11) 今尚人々は遊蕩児、法学者、金持ち、長老の支配下にあるということ。
12) 「鋭利な剣」自我のこと。

富める者たちの屋敷を揺り動かすがよい
奴隷たちの血汐を信仰の焰で熱く熱し
小さな雀を鷹と闘わせるがよい
民衆が支配する時代が到来する
古びた^{しるし}徴が目に入ったら消し去ってしまうがよい
農民たちが日々の糧すら得られないような畑なら
その麦の穂を焼き払ってしまうがよい
創造主と被造物の間に仕切りなどあろうか
教会から長老たちを追い払ってしまうがよい¹³⁾
神には平伏、偶像には巡回礼拝——それだけとは……
カアバや寺院の灯りなど吹き消してしまうがよい¹⁴⁾
大理石の建物など不快だけである
私のために土の聖殿を新たに建てるがよい
新文明とは硝子職人たちの作業場である
東洋の詩人に気の狂い方を教えてやるがよい¹⁵⁾

ムッラーと天国¹⁶⁾

私もそこに居合わせていた——黙っていることができなかった
天国に來いという命令が神からムッラーに下ったそのときに
私は言った——「おお、神様、恐れながら申し上げます
天女も酒も花園もムッラーは気に入らないでしょう
天国には諍いや論争の場がありません
言い争いこそこのアッラーの僕の天性なのです¹⁷⁾
人々に悪徳を教えること、それがこの者の仕事です
しかし天国にはないのです、モスクも教会も偶像寺院も」

宗教と政治

教会の基盤は反世俗主義にあった

13) 神と人間との間に介在するキリスト教指導者を批判している。

14) 儀礼だけでは不十分ということ。

15) 「硝子職人たちの作業場」西洋文明の脆さを示唆している。
「東洋の詩人」イクバルのこと。

16) 「ムッラー (mullā)」 シャリーアを重視するイスラームの宗教指導者。

17) 「このアッラーの僕」ムッラーのこと。

清貧生活は政治権力と関わりを持つであろうか¹⁸⁾
君主と隠者とは対立していた
一方は頭を高く上げ、他方は頭を低く垂れるからである
政治は宗教から離れ
教会の長老は力を失った¹⁹⁾
宗教と国家とが分離した途端
君主は貪欲になり、宰相は強欲になった
この分離は国家と宗教にとって禍である
この分離によって文明は視力を失った
一人の遊牧民が奇跡を起こした
その福音は同時に警告でもある²⁰⁾
人類の安寧は
ジュナイド的なものとアルダシールのなものが一体となったところにある²¹⁾

大地は神に属す

種子を地中の暗闇で育て上げるのは誰か
海の波から雲を生み出すのは誰か
西から良風を吹かせるのは誰か
大地は誰のものか、太陽の光は誰のものか
麦穂の袋を真珠で満たしたのは誰か
交代することを季節に教えたのは誰か
おお、地主よ、この大地はお前のものではない
お前の祖先のものでもない、お前のものでも私のものでもない

時

かつて在ったものは今はなく、今在るものは消えてしまう——これが物事の道理である^{せかい ひみつ}
^{わたし}時は現れようとしているものが現れるのを待っている
^{わたし}時の酒瓶から次々と事象が滴っている
^{わたし}時は昼夜という数珠玉を一粒一粒爪繰っている

18) 「教会」 キリスト教会を指す。

19) 「教会の長老」 ローマ教皇のこと。

20) 「一人の遊牧民」 ムハンマドのこと。コーランの中で彼は福音をもたらす者、警告を与える者と呼ばれている（サバの章 28 節、高壁の章 188 節）。ムハンマドは福音（宗教）と警告（政治）とを一体化させていたということ。

21) ジュナイド (Junaid, d. 910) はペルシアの著名なスーフィー。アルダシール (Ardashīr, d. ca. 241) はサーサーン朝の初代君主。精神性と政治的な力両方が必要ということ。

誰とでも交るが、^{わたし}時の接し方は一様ではない
乗ることもあれば、乗られることもあり、教訓の鞭を振るうこともある
もしおまえが宴に加われないとしても、それは^{わたし}時の過ちなのか、おまえの過ちなのか
^{わたし}時はいない者のために宴の酒を取り置いたりはしない
^{わたし}時の^{うごき}旋回は占星術師の目には分からない
叡智の目で射なければ的に矢は当たらない
西の地平線にあるのは夕焼けではなく血の河である
「明日」の訪れを待つがよい、「昨日」と「今日」はもはや昔話となっている²²⁾
自然の持つ力を露わにしたあの傲慢な思想が宿る巢は
自分自身の蠢く稲妻によって危険に晒されている²³⁾
大気も海も船も彼らのものである
しかし渦の結び目を解くことができるであろうか——この渦は運命の別名である²⁴⁾
新しい世界が生まれつつある——古い世界は滅びつつある
西洋の賭博師たちによって賭博場にされてしまったこの古い世界は
風は強いが灯りが灯され続けている
神が王者の威光を授けた清貧の人の手によって²⁵⁾

パンジャーブの農民に

言うがよい、何のために生きているのか
何千年もお前は大地を相手に生きてきた
この大地にお前の火は埋もれてしまった
早朝の礼拝時刻である——さあ、目覚めるがよい
地上に住む者の糧は地中にある
しかしその地中の暗闇には不死の水は存在しない²⁶⁾
自我を試みようとしないうなら
その者が持つ宝石には価値はない
部族という偶像を打ち壊すがよい
古びた慣習の鎖を断ち切るがよい
世界に^{タウヒード}一神教がはっきりと姿を現すように行動すること
そこにこそ確固たる信仰があり、それこそが成功の扉を開くのである
肉体の大地に心という種子を撒くがよい

22) 「西の地平線」 西洋を指す。

23) 「傲慢な思想が宿る巢」 西洋のこと。
「稲妻によって……」 稲妻が巢を焼き払おうとしている。稲妻と夜鶯(^{ブルブル}bulbul)の巢の比喩はウルドゥー詩でよく用いられる。

24) 西洋を破滅させるために「渦」が待ち受けている。

25) 「清貧の人」 イクバルのこと。

26) 人間には精神的な糧(不死の水)も必要ということ。

種子は収穫されるとき、その眞価^{すがた}を現わすであろう²⁷⁾

パンジャーブの長老^{ビール}後継者たちに²⁸⁾

シャイフ・ムジャッディド師の墓廟に私は詣でた
天の下、四方に光を放つ師の墓廟に²⁹⁾
星すら恥じ入らせる墓廟の土粒^{つち}
その下に眠っておられるのは奥義を知る御方である
師はジャハーンギールにも屈せず
師の熱い信仰は今も自由な精神を持つ者たちを勇気づけている³⁰⁾
師はインドのイスラーム共同体が持つ富を守護された
神は手遅れになる前に師に警告されたのである³¹⁾
私は祈った——「清貧を授け給え」と
「目は開いています、しかし目覚めてはいないのです」
声がした——「清貧の伝承は止まってしまった
目覚めた者たちはパンジャーブを嫌悪している
覚醒した者のいる場所ではない、ここでは
清貧の帽子から威厳あるターバンが生み出されている³²⁾
清貧の帽子によって眞理^{かみ}を求める心が生まれていたのに
このターバンは政府への奉仕に酔い痴れることを促している」³³⁾

悪魔の請願

悪魔が世界の主にこう言った——
「人間、この一握りの土くれが燃え盛る焰となっています³⁴⁾
命が枯渇しているのに肥え太り、美しい衣服を纏っています

27) この詩句はペルシア語。

28) 「長老 (pīr)」ここではスーフィー教団の指導者のこと。

29) シャイフ・ムジャッディド (Shaikh Mujaddid) シャリーアの遵守を訴えたスンナ派思想家・スーフィー、アフマド・スィルヒンディー (Ahmad Sirhindi, d. 1624) のこと。「(ヒジュラ歴) 第2千年期の革新者 (mujaddid-e alf-e thānī)」と呼ばれる。イクバルは1934年6月29日夕刻、ラホールから列車でスィルヒンドに向かい、彼の墓廟を訪れている (Nadhīr Niyāzī, *Makrūbāt-e Iqbāl*, Lahore, 1977, pp. 161–162)。

30) スンナ派イスラームを蔑ろにするジャハーンギールの宗教姿勢に批判的であったアフマド・スィルヒンディーは投獄されたことがある。召喚されたとき、「私は神以外の者には平伏しない」と言ってジャハーンギールに平伏しなかったという逸話がある。

31) スンナ派イスラームを重視しないアクバル及びジャハーンギールの時代にスィルヒンディーは活動した。

32) 「帽子 (kulah, kulāh)」円錐形の帽子。
「威厳あるターバン」直訳すると「ターバンのトゥッラ (turrah)」。トゥッラはターバンの布の直立した先端で、威厳を示す。

33) パンジャーブのスーフィー教団がイギリスに協力的であることを批判している。

34) 「燃え盛る焰」厄介な存在。

心は衰弱しているのに、頭がよく、抜け目がありません
不浄であると東洋の聖なる法が断定したことを
西洋の法学者たちは清浄であると主張しています
御存じないのですか、天上の乙女たちが
天国が寂れてしまうのではないかと心配して悲しんでいるのを³⁵⁾
今や政治家が人々にとって悪魔です
私が天の下にいる必要はないのです」

怒れる門弟³⁶⁾

私は土製のランプすら持っていないのに
長老殿^{ビール}の屋敷は電灯で明るく光り輝いている³⁷⁾
町に住もうが村に住もうがムスリムは純朴である
カアバのバラモンたちは偶像のように崇拝されている³⁸⁾
聖地^{ビール}の長老たちに献上された品々はそっくりそのまま彼らの利得^{もの}となる
彼らは汚濁塗れの服を纏った商売人である
説教を垂れる座を彼らは世襲しただけである
鷺の巣は烏に奪われてしまったのである

35) 善行者がいなくなり、誰も天国に来なくなる。

36) 「門弟」 スーフィー教団の信者。

37) 「長老(pīr)殿」 スーフィー教団の指導者。

38) 「カアバのバラモンたち」 バラモンのように振舞うスーフィー教団の指導者たちということ。